

SASAKAWA HEALTH FOUNDATION

笹川保健財団
年次報告書2023



Better Health & Dignity for All

笹川保健財団
SASAKAWA
Health Foundation

2023年を回顧する —未来への飛翔の種を蒔けたらどうか？

公益財団法人笹川保健財団 会長

喜多悦子



正確には2019年秋に始まった新型コロナウイルスCOVID-19のパンデミックは、ワクチン接種や実感染後の経過を含むウイルスや薬剤に関する医学的な研究は続いていくとはいえ、連日の感染者や発症者数が問題で、いわゆる激しい規制が必要な時期は終わりました。100年前の、通称スペイン風邪と同じように、この感染症もひとつの時代の区切りのように語られる時代が始まっているように思います。

その最後の年であった2023年、笹川保健財団は、パンデミックの消長をうかがいながら、中断していた活動を再開し、規模縮小せざるを得なかった支援を旧に復すだけでなく、新たな活動を始めました。国の内外で財団が担うべき責務を再開、復旧、新設できましたことは、偏に財団とその活動に対して寄せていただきました各位のご支援とご関心のおかげであり、心から感謝申し上げます。

世界各地でのハンセン病新規感染は、財団創設の約50年昔に比べると、100分の1に激減しましたが、個々の感染者にとって「やまい」の存在は同じです。そして長い歴史にもかかわらず、また、財団の膨大な差別偏見への介入にもかかわらず、制度はできたものの、個々人の被っている苦難はそれほど解消されていないともいえます。私たちはWHOハンセン病制圧大使である笹川陽平日本財団会長を支えとともに、世界のハンセン病当事者と連携を図り、この病気に対する保健学的そして社会学的アドボカシー（唱道活動）を強化してまいりました。果てしない道をのる歩んでいるようでもあります。ハンセン病対策は、医学的公衆衛生的そして社会的人道的にも財団が歩むべき道を知らしめてくれています。引き続き努力していきますので、いっそうのご支援をお願いいたします。

「看護師が社会を変える」と大言壮語して開始した「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業の修了者らがつくる緩やかな日本財団在宅看護センターネットワークにより、30都道府県で160を超える地域看護活動拠点が設立され、総勢1,300名のスタッフが日夜、地域での活動を繰り広げています。新型コロナウイルス対策が在宅に広がって以来、仲間たちは各地各様の機能と連携を強化し地域社会を護りました。

2023年には小規模ながら仲間の事務所での実務研修(On the Job Training)と北欧研修を開始、さらに「看護師が世界を変えよう」という意気込みで始めた「Sasakawa看護フェロー海外留学奨学金」を活用した、アメリカ7大学院への留学が実現。さらに保健系学生のための「笹川保健財団みらい塾」も始まりました。看護系の各種グループ仲間が増えました。

新たな時代に向けた仕込みをした2023年度でしたが、引き続き、いっそうのご支援ご鞭撻を心からお願い申し上げます。

会長ブログ ネコの目

医師ならではの視点から論説、エッセイ、活動の様子・紹介を随時更新しています。

https://www.shf.or.jp/blog_chair



Contents

- 3 | 会長挨拶
2023年を回顧する—未来への飛翔の種を蒔けたらどうか？
- 4 | 財団について
活動理念／使命／行動基準
- 5 | 活動
ハンセン病対策／地域保健の推進
- 6 | ハンセン博士によるらい菌発見150周年記念イベントの開催
- 7 | 国立ハンセン病資料館
2023年度 厚生労働省受託事業「国立ハンセン病資料館等の運営と啓発広報一式」活動報告
- 8 | ハンセン病対策 活動紹介
- 10 | 地域保健の推進 活動紹介
- 12 | 活動報告
- 14 | 会計報告／財団概要

VISION

活動理念

Better Health & Dignity for All

すべての人々に、より良き健康と尊厳を

すべての人々が、いつでも、どこでも、どんな状況下にあっても、
身体的にも、精神的にも、社会的にも、さらにスピリチュアルにも、より良い状態と、
人としての尊厳を維持できる社会を目指します。

MISSION

使 命

人々がどのような状況にあっても、
健康で尊厳ある生活を送ることができるよう、
私たちは支援します。

VALUES

行動基準

- ・グローバルな視点を持ち、活動理念を追求し、新しいことに挑戦し続けること。
- ・共生社会の実現に向けて、科学的根拠に基づいた手法を用いて問題解決に当たること。
- ・世界の一員として、互いに顔が見える信頼関係を築き、
志を同じくする仲間の力を結集し、支援を必要とする人々が自ら立ち上がる力を支えること。

ハンセン病対策

ハンセン病問題のない世界、ハンセン病を経験したことで苦しむ人々がなくなる世界の
実現を目指し、3つの柱の下で活動を実施しています。



病気による負荷をなくす



偏見・差別をなくす



歴史を保存する

「看護師が社会を変える!」

地域保健の推進

「医療」だけでなく「生活」支援にも関与できる看護師が、
地域で力を発揮できるようになるための人材育成や活動支援を行っています。



在宅看護で地域の健康を守る



地域保健力を強化する



看護リーダーを養成する

ハンセン博士による らい菌発見150周年記念イベントの開催

2023年は、ノルウェーのゲルハール・アルマウェル・ハンセン博士によってらい菌が発見されてから150周年という、ハンセン病の歴史にとって節目の年でした。ハンセン博士によるらい菌の発見は、人類史上初めて病原体を特定した画期的な出来事でした。この発見は医療分野において大きな進歩をもたらしましたが、現在でも年間約20万人の新規患者が報告されており、らい菌発見以前に呪いや神の罰と考えられていたハンセン病への偏見や差別は、現在も世界中で根強く残っています。笹川ハンセン病イニシアチブでは、らい菌発見150周年を啓発活動の好機ととらえ、ハンセン病問題への関心を喚起するため、さまざまな記念イベントを開催しました。

ハンセン博士がハンセン病患者の検体から棒状の細菌を検出したと初めてノートに記した日が1873年2月28日でした。最初の記念イベントは、ちょうどその150年後にあたる2023年2月28日に、ハンセン博士の出身地であるノルウェー・ベルゲン市で、ベルゲン大学との共催により実施されました。イベントでは、エンゴ市長、ハンセン病当事者、ハンセン博士のひ孫のパトリックス氏らをスピーカーとして迎え、ハンセン病の過去の振り返り、



ハンセン博士によるらい菌発見150周年記念イベント
(於：ノルウェー、ベルゲン、2023年2月28日)



ハンセン病当事者団体の活動の好事例紹介ポスター展示の前
で参加者と笹川陽平WHOハンセン病制圧大使
(於：ノルウェー、ベルゲン、2023年6月21日、22日)



らい菌発見150周年ハンセン病国際会議(於：ノルウェー、ベルゲン、2023年6月21日)

現状の分析、今後の取り組み等について議論されました。

続いて、2023年6月21日、22日に「ベルゲンハンセン病国際会議」を、ベルゲン大学と共催しました。直前の6月6日と13日には、この会議をより一層充実したものにするため、基調講演者を招いた事前ウェビナーも開催しました。本会議では、医療、社会、歴史保存の専門家や研究者、NGO関係者、ハンセン病当事者団体代表等約200人が集まり、医療、人権と尊厳、歴史保存の3つのテーマでセッションを行いました。会議の開会式では、テドロス・アダノムWHO事務局長がビデオメッセージを寄せ、「らい菌が発見され150年、WHOが発足して75年が経ち、ハンセン病との闘いは多くの進歩を遂げてきたが、『ハンセン病ゼロ一疾病ゼロ、障害ゼロ、差別ゼロ』という共通の目標に向けて、まだ多くの課題が残されている」と述べ、「コロナの大流行により崩壊した医療システムの正常化には、さらなる努力が必要だ」と語りました。開催期間中、会議場にて学術セッションと、ハンセン病当事者団体による活動の好事例紹介セッションからなるポスター展示も行われました。

150周年記念イベントの締めくくりとして、2023年10月24日

から26日にかけて「アルマウェル・ハンセン国際映画祭」をベルゲンで開催しました。この映画祭は、ベルゲン大学、ベルゲンハンセン病ミュージアムの協力を得てベルゲン国際映画祭と共催したもので、ハンセン病をテーマにした世界初の国際映画祭となりました。ハンセン病の歴史、偏見と差別、そしてハンセン病との闘いをテーマにした、4本の長編映画と2本の短編映画が上映されました。また、ベルゲンのハンセン病ミュージアムでの上映や、学校向けのプログラムも行われました。

一連のイベントを通して、多くの関係者と連携することができ、ハンセン病に関する正しい情報を広め、当事者に対する偏見や差別を払拭するうえで、貴重な機会となりました。

2023年度 厚生労働省受託事業 「国立ハンセン病資料館等の運営と啓発広報一式」活動報告

2023年5月には、新型コロナウイルス感染症が5類に移行され、一変した私たちの生活の在り方も、徐々に落ち着きを取り戻しています。国立ハンセン病資料館も2023年度は入場制限・人数制限のない通常開館でお客様をお迎えできる1年となりました。

2022年度末から2023年5月まで開催した企画展「いのちの芽」は、資料館初の文学展示でした。多くの方が展示の前で文章を味わい、若い世代がSNSで熱心に発信してくださったのが印象的でした。8月から12月にかけて開催した企画展「らい予防法闘争70周年」は、予防法改正をもとめて闘った入所者の運動という、非常に重要なテーマを取り上げました。2024年3月に開始した企画展「絵ごころでつながる」は、2019年以来5年ぶりの絵画展となりました。一人でも多くの方にハンセン病資料館に足を運んでいただけるよう、多様なテーマを取り上げた企画展を計画しています。

ハンセン病資料館の展示とならぶ事業の柱である出張講座は順調に数を伸ばし、2023年度は過去最大の16,000人弱のお客様にお話をすることができました。ハンセン病問題についての理解を深めていただくとともに、身近な差別・人権問題について改めて考えるきっかけとなった、という声をいただいています。



夏休みに開催した小学生向けの体験型展示解説。療養所の寮(ジオラマ)に入ってみる子供達

ハンセン病問題をさまざまな切り口から語るミュージアムトーク、「ハンセン病と人権」セミナー、各種講演会、夏休みの小学生向けイベント等対外的な事業に加え、収蔵資料の整理にも注力しました。2023年度は文書資料の整理、音声・動画資料のデジタル化を集中して行いました。療養所の中での生活を伝える貴重な音声資料や、入所者の闘争の記録がうかがえる文書資料も見つかっています。ハンセン病問題を次世代以降に伝えていくために必要不可欠な資料の整理、調査は、今後も継続して行っています。

2023年3月にハンセン病問題施策検討会最終報告書が提出され、偏見差別解消、普及啓発の取り組みが不十分であること、3省連携の継続性ある系統的な施策が必要であること、ハンセン病問題に係る全国的な意識調査が必要であることが報告されました。2023年8月には資料館展示見直し検討会の最終報告書が提出され、資料館の常設展示のリニューアルについての方針が決定されました。また、2023年12月には、前述施策検討会の提言を受けた全国意識調査が行われました。いずれもハンセン病資料館の事業に大きく影響する流れです。正しい知識の普及啓発による偏見・差別の解消と、患者・元患者とその家族の名誉回復を図るため、事業内容を見直し、優先順位を付けて、効果的な事業を展開していきますので、今後とも温かいご支援をお願いいたします。



企画展「絵ごころでつながる一多磨全生園絵画の100年」プレス向け内覧会

所在地 東京都東村山市青葉町4-1-13

開館時間 午前9時30分～午後4時30分
(入館は午後4時まで)

入館料 無料

休館日 月曜日および祝日の翌日。ただし、月曜日が祝日の場合は開館。年末年始。館内整理日。

国立ハンセン病資料館 公式YouTubeチャンネル
<https://www.youtube.com/c/hansenmuseum>



ハンセン病はらい菌による慢性の感染症です。かつて不治の病と呼ばれていましたが、現在は多剤併用療法(MDT)という治療法が確立しているため、早期発見・早期治療を行えば治癒する病になりました。しかし、世界では毎年約20万人の患者が新たに診断され、当事者やその家族は社会からのいわれのない偏見や差別に苦しんでいます。当財団は、ハンセン病問題のない世界、すなわちハンセン病を経験したことで苦しむ人々がいなくなる世界の実現を目指し、「病気による負担をなくす」、「偏見・差別をなくす」、「歴史を保存する」の3つの柱の下で、活動を実施しています。2023年度もハンセン病問題に取り組む内外の多彩な団体と連携し、さまざまな活動を展開しました。

2023 Highlights

Tackling Disease

Don't Forget Leprosy～ハンセン病を忘れないで～キャンペーンを継続



笹川陽平WHOハンセン病制圧大使は、アフリカの最高峰キリマンジャロ(5,895m)登頂に成功、「Don't Forget Leprosy」のバナーを掲げた
(於：タンザニア、キリマンジャロ、2024年2月12日)



ヴォルカー・ターク国連人権高等弁務官とバナーを掲げる
(於：スイス、ジュネーブ、2023年6月)

ハンセン病対策推進のため、2021年に開始したDon't Forget Leprosy～ハンセン病を忘れないで～キャンペーンを、2023年度も継続し、さまざまな活動を展開しました。

中でも笹川陽平WHOハンセン病制圧大使は、各国の元首や国際機関の高官と面談した際、同キャンペーンに対する賛同を呼びかけました。2024年2月12日には、キャンペーンの一環として、アフリカ大陸最高峰のキリマンジャロの頂上から「Don't Forget Leprosy」のバナーを掲げ、アフリカでのハンセン病ゼロの実現を訴えました。登頂成功について笹川大使は「世界中でハンセン病制圧のため活動している関係者みなさんの奮起を期待して登頂しました。これを機会にハンセン病活動が一層活発になるよう願っています」と語りました。

Tackling Disease

第2回バングラデシュ全国ハンセン病会議をダッカにて開催

2023年11月12日、第2回バングラデシュ全国ハンセン病会議を、バングラデシュ保健家族福祉省と共催しました。コロナ禍で停滞したハンセン病対策を再び強化し、2030年までにバングラデシュからハンセン病をゼロにすることを目的に、保健関係者や、国内外の専門家、国際NGO、ハンセン病当事者団体代表らが一堂に会しました。

開会式で笹川大使が、4年前の第1回全国会議でハシナ首相が2030年までにハンセン病をゼロにするという目標を掲げたことに対して、一国の指導者がこのようにハンセン病に関して明確なゴールを示した例は他にはないと感謝を述べると、ハシナ首相は、ハンセン病当事者の雇用促進、対策予算の増額、治療薬の国内製造等、具体的なアクションを示し、2030年までのハンセン病ゼロ実現への意欲を表しました。会議では、2023-2030年の国家ハンセン病戦略も発表され、今後、1) 国家ハンセン病プログラムの強化、2) 患者発見/予防活動の拡大、3) 障害の予防、4) 当事者の参加促進、の4つの柱で活動が展開されます。



国家ハンセン病プログラムの発表。左から笹川陽平WHO大使、ハシナ首相、マレク保健大臣、アラム保健サービス部長官
(於：バングラデシュ・ダッカ、2023年11月)

Fighting Discrimination

ハンセン病差別撤廃のためのグローバル・アピール2024開催



式典で宣言文を読み上げる子供達を見守るテドロス・アダノムWHO事務局長(右)とWHO笹川陽平ハンセン病制圧大使(左)
(於：2024年1月31日、スイス、ジュネーブ)

2024年1月31日、スイス・ジュネーブのWHO本部において「ハンセン病差別撤廃のためのグローバル・アピール2024」式典をWHOと共催しました。式典では、テドロス・アダノムWHO事務局長と、笹川陽平WHOハンセン病制圧大使が、ハンセン病に対する正しい知識を広めることでいわれのない差別をなくし、治療が可能な病気のために人々が社会から取り残されることがないようにと訴える宣言文に署名しました。

テドロス事務局長は笹川大使との対談で、WHOの世界ハンセン病戦略2021-2030ではハンセン病ゼロを達成するために必要なことを明示しており、これを実行する国を全力でサポートすることを確約しました。

笹川大使は、ハンセン病制圧のための笹川ハンセン病イニシアチブとWHOとの協力関係が、来年で50年目を迎えることを挙げ、長い協力の成果を示す責任を感じており、自らの生涯をこの目標達成のために捧げると決意を述べました。

Fighting Discrimination

ブラジル当事者団体MORHANの政府へのアドボカシー

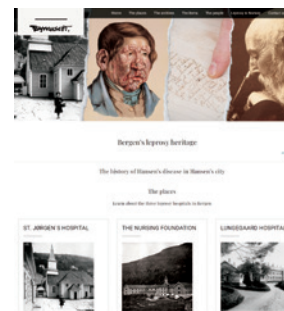
MORHANは1981年の設立以来、ブラジルにおけるハンセン病問題の解決を目指して、偏見・差別、人権、歴史保存への取り組みを中心として幅広い活動を展開してきました。財団の支援によりこの10年で47の支部が開設され、現在68の支部で、2,910名のボランティアが各地で活動を行っています。特に政府へのアドボカシー活動や啓発活動ではブラジルで唯一無二の存在で、保健省が設置する保健審議会のメンバーとして政策提言を行う等、大きな影響力を有しています。2023年11月には、MORHANによる長年の政府へのアドボカシー活動が実を結び、ハンセン病を理由に強制隔離された患者や、引き離された子供達に対する補償を生涯年金の形で支給する法案が承認されました。2023年1月に就任したルーラ・ダシルバ大統領が出席しブラジリアで行われた署名式には、全国からMORHANのメンバー550名が駆け付け、勝利を祝いました。



賠償法承認の署名を掲げるブラジルのルーラ・ダシルバ大統領(中央)とニシア・トリンダーデ保健大臣(中央右)とMORHANの代表者ら(2023年11月24日)

Preserving History

Bergen City Museum デジタルミュージアムの開設



ベルゲンミュージアムウェブサイト「デジタルミュージアム」

らい菌発見150周年記念行事の一環として、Bergen City Museumによるデジタルミュージアム開設に協力しました。このデジタルミュージアムは、ノルウェー語と英語の両言語でらい菌の発見とノルウェーにおけるハンセン病の歴史について学ぶことができます。

ノルウェーにおけるハンセン病の蔓延状況、隔離に関する法律や政策等、専門的なテーマのエッセイの他、St. Jørgen's Hospitalなどの歴史的な建造物を3Dで体験するバーチャルツアーも含まれています。また、患者の子孫や専門家へのインタビューを通じて、らい菌の発見と隔離政策、その影響を紹介する短編ビデオもご覧いただけます。

ベルゲンミュージアムウェブサイト
<https://www.lepra.no/>



「看護師が社会を変える!」そのために在宅看護事業を起業する起業家育成を開始してから10年目となった2023年度には、育成事業第2弾として、事業所でのOJTを含む「開業者育成研修」を新たに実施しました。3年以上にもわたるコロナ禍を乗り越えた日本財団在宅看護センターネットワークでは、この研修の受け入れの他、定期的な勉強会や海外研修も始まり、活動が活発化しています。地域保健事業部では、その他学生を対象とした研修も新たに開始し、ますます看護・保健分野の人材育成に力を入れた年となりました。

2023 Highlights

Home-Care Nursing Network

「日本財団在宅看護センター」新規開業者育成研修スタート

2014年度に開始し、108名の修了者をもって一旦休止していた「日本財団在宅看護センター」起業家育成事業は、知識だけでなく、研修全体を通じ、開業するための覚悟や起業家マインドを養う8か月間の集中研修でした。第2弾初年度となる2023年度は、この事業目標を引継ぎつつ、実際のフィールドで在宅看護と事業所経営の実践を学ぶ6か月のOJTを含む新たな研修を開始しました。4名の研修者たちは、前期・中期・後期の3回、それぞれ数日間の集中講義を通して、在宅/訪問看護の歴史、現状や課題、経営に必要な財務、労務、情報発信、さらに福祉や地域行政等について学んだほか、大阪市、和歌山市、広島市、豊島区、文京区でそれぞれ開業し、活躍している「日本財団在宅看護センター」の事業所に赴き、OJT研修に参加しました。研修の最後にそれぞれの開業計画を発表する場には、OJT受入れ事業所の先輩開業者たちも集まり、全員がそれぞれの地域の課題に沿った開業計画の承認を得て、研修を修了しました。修了者たちは、今後1年以内に新たな事業所を立ち上げ、日本財団在宅看護センターネットワークに仲間入りする予定です。



OJT研修に参加した研修者と受入事業所の仲間たち



全員が開業計画を発表し、研修を修了しました

日本財団在宅看護センターネットワーク

30都道府県に**162**か所の「日本財団在宅看護センター」が活動しています。(2024年5月1日現在)



毎年参加している日本在宅医療連合学会大会では「在宅看護の不都合な真実」と題したスポンサードシンポジウムを開催



在宅看護に関するオンライン公開講座は、認知症と緩和ケアをテーマに全7回開催



修了者数
112名

全事業所……………	162
(内訳)	
看多機……………	8
訪問看護事業所……	97
支所……………	11
サテライト……………	16
ホームホスピス……	1
居宅介護……………	14
訪問介護……………	2
児発……………	5
(放課後等デイサービス)	
定期巡回……………	3
特定相談……………	1
日中一時支援…………	2
その他……………	2



日本財団
在宅看護
ネットワーク
The Nippon Foundation
Home-Care Network

各事業所の情報は財団HPをご参照ください

Home-Care Nursing Network

在宅看護ネットワーク初の北欧研修



フィンランドのシェルターで説明を聞く参加者たち

超高齢化と人口減少に伴う課題と向き合い、看護師としての対応を考察することを目的に、日本財団在宅看護センターネットワークの事業所約160か所計1,300名の管理者・スタッフから希望者を募り、北欧研修を実施しました。12名の視察団が訪問したのは、「幸福度世界1位」のフィンランドと、同じく高福祉国として知られるデンマークで、フィンランドでは独自の母子保健診療所として知られるネウボラやターミナルケア施設、デンマークでは高齢者福祉施設を視察しました。参加者からは、訪問国の取り組みをただ称賛するだけでなく、日本の文化や社会状況を反映した対策が必要だとの声が多く聞かれました。本研修の報告書は財団ホームページで公開しています。



Strengthen Community Health Capacity

議論が白熱した研究助成事業報告会

地域の医療サービスをより良くし、充実させるための先駆的で独創的な研究に毎年助成を行う研究助成事業。2023年度は11課題を採択しました。各研究の研究報告書は財団公式ウェブサイトで公開していますが、もうひとつの成果共有の場として財団が設けているのが、研究助成事業報告会です。報告会では、前年度に助成を受けた各研究者から発表をいただきますが、この発表のために地域・在宅医療・看護における多様な職種が集まり、ここでの交流がきっかけで新たな多職種連携のアイデアへとつながることを期待しています。2023年度の研究助成事業報告会では、これまでに財団の助成を受けた先生方にコーディネーター役を務めていただき、白熱した議論が展開されました。



2022年度に引き続きコーディネーターを務めた日下部先生(左)と、22年は発表者側だった下郷先生(右)

Cultivate Nursing Leaders

日本を知り、世界で多様性を学ぶSasakawa看護フェロー



夏に参加したペルーでのインターンシップについて発表を行うワシントン大学留学中のフェロー

事業開始3年目を迎えたSasakawa看護フェローでは、2022年に留学を開始した3名に加え、5名が新たにアメリカで大学院留学を開始しました。それぞれのフェローが多様な環境で学ぶ様子は財団公式ウェブサイトで公開しています。また、2024年の留学に向けて準備を進めていたフェローたちも健闘し、13名がアメリカ、カナダの大学院に合格しました。留学前に日本の地域医療や社会課題を学ぶ地域フィールド視察研修では熊本に赴き、在宅看護の現場や社会的差別を伴う健康問題の歴史、福祉等について大いに学びました。



熊本研修で訪問した菊池恵楓園自治会にて、志村自治会長、太田副会長と

ハンセン病問題の啓発活動で ミス・スプラナショナルと協力

「ミス・スプラナショナル」は世界五大ミスコンテストの一つとも言われ、毎年、各国/地域の代表が世界一の座を争います。特筆すべきは、ミス・スプラナショナルが、美しさだけでなく、個々のコンテスタントが社会的責任を果たし、世界のさまざまな問題に取り組むことを求めていることで、社会貢献や慈善活動は、ミス・スプラナショナルの特色の一つです。

ミス・スプラナショナルとの協力関係のスタートとして、2023年7月7日に大会の開かれたポーランドで、「ミス・スプラナショナル ハンセン病フォーラム」を開催しました。コンテストに参加した65か国/地域の代表に、ハンセン病問題の啓発活動への参加を奨励するため、ハンセン病の基礎情報やハンセン病当事者団体代表の体験談の提供、パネルディスカッション等を行いました。質疑応答では、ハンセン病の感染経路や病状等多くの質問が寄せられ、すべてに答えるには時間が足りないほどで、ミス達の関心の高さがうかがえました。大会後には、多くのミスがSNSで、ハンセン病問題について発信しました。



65か国/地域のミス・スプラナショナルと(於:ポーランド・クラクフ、2023年7月)

また、2023年大会優勝者のエクアドル出身のアンドレア・アギーラさんは、ミス・スプラナショナルとして多様な活動に参加するかたわら、ハンセン病の啓発活動にも積極的に取り組んでくれました。世界ハンセン病の日に合わせて、動画で啓発メッセージを発信し、SNSの初投稿だけで7万回以上の視聴がありました。さらに、ブラジルとペルーを訪れ、ハンセン病施設への訪問や当事者団体との



交流を行いました。特にブラジルでは、行政にハンセン病問題についての嘆願書を提出する等、啓発活動の効果を拡大するために積極的な役割を果たしました。

ミス・スプラナショナル2023のアンドレア・アギーラさんは、ペルーの当事者団体70名のメンバーと交流し、そのライフストーリーを聞くことで、話を聞くことが持つ癒しの力について気付いたと語っています(於:ペルー・イキトス、2024年1月)

次世代を担う保健分野の人材育成

財団では、保健・医療の現場でグローバルに活躍できる各種人材育成を行っています。2023年度は次世代を担う学生、大学院生を対象とした研修を行いました。

その一つが、日本のみならず世界の健康問題や人間の安全保障を考え、対処できる人材育成を目標とした「笹川保健財団 みらい塾九州スタディツアー」です。長崎を舞台に2023年8月28日から5日間、長崎大学を中心とした多様な講師陣による講義やグループワーク、博物館や資料館をめぐるフィールドワークを行い、所属や専攻も異なる12名の学生等が互いに交流を深めました。本事業の報告書は財団ホームページで公開しています。



グループワークの様子



みらい塾報告書



みらい塾に参加した学生たち

もう一つの学生支援が、国際看護師協会(International Council of Nurses:ICN)が主催する2年に一度の国際大会への日本人看護学生派遣です。世界から数千人が参加するというカナダ・モントリオールで開催された大会と、その前日に開催された学生議会に参加するための費用を一部支援し、12名の日本人看護学部生、大学院生を国際舞台に送り出しました。参加者たちは、会期中に世界的な研究者と意見を交わし、SDGsやPlanetary Health等世界の看護界で重要視されている課題に考えを巡らせる機会としていました。



ICN学生議会に参加した日本人看護学生たち

WHO笹川健康賞

WHO笹川健康賞は、WHOが世界の人々の健康増進のため、顕著な貢献のあった個人、または非政府組織等を顕彰するもので、賞の創設以来、財団は本賞の賞金および記念のトロフィーの授与を行っています。39回目を迎えた2023年度は、ネパールの団体Nick Simons Institute(農村部における保健・医療従事者の人材育成医療制度の改善)とタイのVichai Tienthavorn教授(セラセミア(遺伝性貧血症候群)予防と管理)が受賞しました。2023年5月26日に行われた授賞式では、笹川陽平日本財団会長が「受賞を通じて、プライマリーヘルスケアのさらなる進歩のためのパイオニアとして活躍し続けることを願います。」と受賞者へ祝辞を贈りました。



Nick Simons Institute代表者
(左から二人目)



Vichai Tienthavorn教授
(左から二人目)

香港ジョッキークラブ共催 「高齢化社会を考える」

香港ジョッキークラブチャリティトラストは、香港における競馬競技の収益や寄付等の余剰金を慈善活動と地域貢献に還元する活動を行っている世界有数の慈善団体です。そのトラストが主催する持続可能な都市のための国際会議「PBCフォーラム」において、日本財団、同トラストと共催で、高齢化社会に関するセッションを企画、実施しました。アメリカやオーストラリアからも専門家を招き、環アジア太平洋地域の高齢化について考えるラウンドテーブルでは、日本財団在宅看護センターネットワークの起業家らが日本の在宅看護の事例を紹介しました。特に、看護師が常駐し、多角的なサービスを提供する日本独自の仕組みである看護小規模多機能型居宅介護(看多機)には大きな関心が集まりました。



日本財団在宅看護センターネットワークを紹介する会長喜多

笹川保健財団50周年記念誌制作

財団では、2024年5月4日の設立50周年に合わせて、記念誌の制作を行いました。記念誌は4つのパートから構成されており、笹川陽平日本財団会長のインタビューから始まります。インタビューでは、財団設立時のエピソード、初期から現在に至るまでのハンセン病対策への取り組み、笹川会長が団長を務めたチェルノブイリ原発事故医療支援の苦労話等、さまざまなお話を伺うことができました。笹川会長からは、「設立以来、ハンセン病対策活動という主軸を変わらずに維持している一方で、その時々で必要とされる活動に真摯に向き合ってきた、それが笹川保健財団のユニークさであり強みである。」と激励をいただきました。

次はハンセン病対策活動、地域保健の推進活動、その他の活動において、それぞれの活動を象徴する、エポックメイキングとなった出来事や事業をまとめています。ハンセン病対策活動には50年という長い歴史がありますが、医療面でのハンセン病という病の制圧が活動の大きな目標だった時代を経て、人権問題や歴史保存といった社会面へのアプローチを始めるきっかけとなった出来事等を紹介しています。地域保健の推進活動とその他の活動では、主に各活動の概要と成果をご覧いただけます。

3つ目はハンセン病対策活動、国立ハンセン病資料館等の運営と啓発広報、地域保健の推進活動について、各担当役員および部長が総括し、活動の経過を振り返りました。エポックメイキングでは書ききれない事業の背景や、その効果や影響、また現在地と今後の見通し等、各事業のディレクターが自分の言葉で書き記した、活動への思いが詰まった総括となっています。

最後の年表では、40周年に合わせて制作した年表の中から主な財団の事業活動を抜き出し、直近10年間の事業活動を追加しました。また世界の出来事を併記し、時代背景をわかりやすくしています。

50年は節目でしかなく、これからも財団は「すべての人々に、より良き健康と尊厳を」を理念に掲げ、活動を続けていきます。これまで財団に関わってくださったすべての皆様に感謝を申し上げるとともに、これからも一層のご協力とご支援をお願いいたします。

正味財産増減計算書内訳表2023年4月1日から2024年3月31日まで

Ⅰ 一般正味財産増減の部			(単位：円)		
科 目			公益目的事業会計	法 人 会 計	合 計
1. 経常増減の部	(1)経常収益	基本財産運用益	0	11,096,164	11,096,164
		特定資産運用益	37,195,378	24,384,807	61,580,185
		事業収益	572,789,000	0	572,789,000
		受取助成金	978,081,382	82,610,000	1,060,691,382
		受取支援金	2,092,706	0	2,092,706
		受取寄附金	12,956,944	0	12,956,944
		雑収益	535,486	28,779	564,265
		経常収益計	1,603,650,896	118,119,750	1,721,770,646
	(2)経常費用	助成金事業費	896,397,545	0	896,397,545
		自主事業費	130,387,927	0	130,387,927
		受託事業費	570,509,833	0	570,509,833
		事業費計	1,597,295,305	0	1,597,295,305
		助成金管理費	0	51,638,405	51,638,405
		自主管理費	0	22,935,806	22,935,806
		管理費計	0	74,574,211	74,574,211
		経常費用計	1,597,295,305	74,574,211	1,671,869,516
		評価損益等調整前当期経常増減額	6,355,591	43,545,539	49,901,130
		特定資産評価損益等	48,770,536	25,784,916	74,555,452
		評価損益等計	48,770,536	25,784,916	74,555,452
		当期経常増減額	55,126,127	69,330,455	124,456,582
2. 経常外増減の部	(1)経常外収益	経常外収益計	0	0	0
	(2)経常外費用	雑支出	0	70,000,000	70,000,000
		経常外費用計	0	70,000,000	70,000,000
		当期経常外増減額	0	△ 70,000,000	△ 70,000,000
		当期一般正味財産増減額	55,126,127	△ 669,545	54,456,582
		一般正味財産期首残高	801,839,715	3,087,785,849	3,889,625,564
		一般正味財産期末残高	856,965,842	3,087,116,304	3,944,082,146

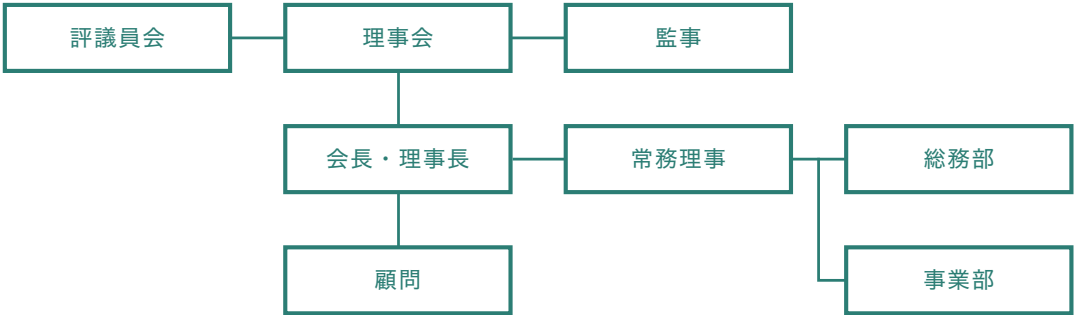
Ⅱ 指定正味財産増減の部					
		受取補助金等	134,537,326	0	134,537,326
		受取寄附金	68,943,437	0	68,943,437
		基本財産運用益	0	1,134,396	1,134,396
		特定資産運用益	28,208,306	0	28,208,306
		特定資産評価損益等	73,969,281	0	73,969,281
		一般正味財産への振替額	△ 160,771,551	△ 1,134,396	△ 161,905,947
		当期指定正味財産増減額	144,886,799	0	144,886,799
		指定正味財産期首残高	3,230,549,860	113,600,000	3,344,149,860
		指定正味財産期末残高	3,375,436,659	113,600,000	3,489,036,659

Ⅲ 正味財産期末残高	4,232,402,501	3,200,716,304	7,433,118,805
------------	---------------	---------------	---------------

財団概要

名 称	公益財団法人 笹川保健財団
英 文 名 称	Sasakawa Health Foundation
代 表 理 事	会長 喜多悦子、理事長 佐藤英夫
所 在 地	東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階
電 話 / F A X	03-6229-5377 / 03-6229-5388
公 式 サ イ ト	https://www.shf.or.jp
設 立 年 月 日	1974年（昭和49年）5月4日
所管官庁に関する事項	内閣府
定 款 に 定 め る 目 的	この法人は、「世界は一家、人類はみな兄弟姉妹」の理念に基づき、世界の安寧と人類の福祉を希求し、 個々人の健康寿命の延長と、身体的病苦のみならず、社会的、精神的、スピリチュアルな健康問題の解消 を目指し、世界で最も苦難を強いられてきたハンセン病患者をはじめとして、すべての人々の保健の向上 に貢献することを目的とする。

組織図



役員・評議員・顧問名簿2024年6月1日現在

会 長	喜多 悦子	日本赤十字九州国際看護大学 名誉学長
理 事 長	佐藤 英夫	
常 務 理 事	南里 隆宏	
理 事	一盛 和世	非常勤理事 長崎大学 客員教授
理 事	遠藤 弘良	非常勤理事 聖路加国際大学 名誉教授
理 事	手島 恵	非常勤理事 東京医療保健大学 副学長・看護学研究科長、国際看護師協会 理事
監 事	金子 明	一般財団法人日本財団母乳バンク 総務部ディレクター
監 事	馬目 利昭	馬目公認会計士事務所 代表
評 議 員	尾形 武寿	公益財団法人日本財団 理事長
評 議 員	坂元 茂樹	公益財団法人人権教育啓発推進センター 理事長
評 議 員	高木 智子	朝日新聞 記者
評 議 員	長尾 榮治	国立療養所大島青松園 名誉園長
評 議 員	福井 次矢	東京医科大学茨城医療センター 病院長
評 議 員	福井 トシ子	国際医療福祉大学大学院 教授・副大学院長
評 議 員	三好 知明	公益財団法人伊豆保健医療センター 医師
顧 問	石垣 靖子	北海道医療大学 名誉教授
顧 問	松本 源二	
顧 問	山下 俊一	福島県立医科大学 理事長特別補佐・副学長

公益財団法人 笹川保健財団

〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階
TEL: 03-6229-5377 FAX: 03-6229-5388

<https://www.shf.or.jp/>



<https://www.facebook.com/SasakawaHealth/>



<https://www.youtube.com/@SasakawaHealthFoundation>



メールマガジンお申し込みはこちら



メールマガジンにご登録いただくと、
当財団が実施する事業に関する
新着情報をお届けします。

Supported by  日本財団 THE NIPPON FOUNDATION